

# 國學院大學學術情報リポジトリ

Two kinds of auxiliary verb "nari" : Presumption or hearsay and conclusion : The examples of end form and definite form

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-06<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 原, まどか<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00000907">https://doi.org/10.57529/00000907</a>                  |

# 推定伝聞「なり」と断定「なり」 —終止形と已然形の場合—

原 まどか

はじめに

活用語に接続する助動詞「なり」に推定伝聞「なり」と断定「なり」との二種があることは言を俟たない。そして、この二種を識別する形式上の基準として、次のような原則が明らかにされている。<sup>(1)</sup>

①活用語の終止形（ラ変型活用語は連体形）に接続する「なり」は推定伝聞、連体形に接続する「なり」は断定である。

1 格子下ろして、ここに寄り来なり。<sup>(2)</sup>（源氏物語・東屋、『源氏物語大成』校異篇一八二五<sup>(7)</sup>）  
2 すきぐしき方にはあらで、まめやかに聞こゆるな

り。<sup>(3)</sup>（若紫、一六一<sup>(2)</sup>）

②撥音便形（無表記も含む）に接続する「なり」は推定伝聞である。

3 心わけ給ふ方もなかなり。<sup>(4)</sup>（蓬生、五三〇<sup>(4)</sup>）

③形容詞型活用語に下接するとき、本活用の活用形に接続する「なり」は断定であり、補助活用の活用形に接続する「なり」は推定伝聞である。

4 やがて、世の政をし給ふべきなれど、<sup>(5)</sup>（濬標、四八五<sup>(9)</sup>）

5 かかる人は罪も重か<sup>(6)</sup>なり。<sup>(6)</sup>（柏木、一二三六<sup>(2)</sup>）  
②原因理由を表す接続句（「已然形＋ば」「〜て」ともに現れる「なり」は断定である。

6 傍ら痛ければ、書かぬなり。(藤袴、九二一⑧)

⑤ 「く・がくなり」構文の「なり」は断定である。

7 たしかに人の語り申し侍りしなり。(藤袴、九二四②)

8 人をいたづらになしつるかこと負ひぬべきがいとからきなり。(夕顔、一三三③)

⑥ 未然形「なら」は、漢文訓読文に見られる「言ふならく・聞くならく」の場合は推定伝聞、それ以外の場合「ならず」「ならむ」などは断定である。

9 あらましう聞こえ騒ぐべきならねば(若紫、一八三

⑧)

10 若紫はいづくにおはしますならむ。(空蟬、八九⑤)

⑦ 連用形「なり」は、「き、つ」に上接する場合は推定伝聞、「けり・けむ」に上接する場合は断定である。

なお、「に」の形の連用形は断定である。

11 物怪もさこそいふなりしか、と思ひ合はするに、(手

習、二〇二八⑨)

12 愁ふなりつる雪、かき垂れいみじう降りけり。(末

摘花、二一九⑦)

13 艶にも凄くも見ゆるなりけり。(帚木、七三②)

14 少しおずかるべき事を思ひ寄るなりけむかし。(浮

舟、一九一七⑧)

15 かくながら身をはふらかしつるにやと、心細う思せ

ど、(明石、四四一⑧)

⑧ 終止形「なり」は、詠嘆の終助詞「や・な」に上接する場合は推定伝聞、仮定の接続助詞「とも」に上接する場合は断定である。なお、「かし」には両方が上接する。

16 さらば、その遺言なりな。(若菜上、一一〇四⑥)

⑨ 連体形「なる」は、連体法の場合と、係結びの結びになる場合と、助詞「が・に・を・は」などに上接する場合は推定伝聞、推量の助動詞「べし・めり」などに上接する場合は断定である。

17 仏のおはすなる所の有様、(御法、一三三三⑩)

18 宮は昨日より内裏になんおはしますなる。(宿木、

一七一三⑧)

19 軽々しうおしなべたる様にもてなすなるが、いとほ

しきこと。(葵、二八三⑬)

20 「誰ぞ」など、案内するなるべし。(宿木、一七八二

⑪

⑩ 已然形「なれ」は、係結びの結びになる場合は推定伝聞である。

21 される人こそかやうには悩むなれ。(宿木、一七〇九⑫)  
これらを一覧表にすると次のようになる。

|     |   |                        |                             |
|-----|---|------------------------|-----------------------------|
| 接続  | ① | 推定伝聞なり                 | 断定なり                        |
|     | ② | 終止形に接続<br>撥音便形に接続      | 連体形に接続                      |
| 構文  | ③ | 形容詞型の補助活用<br>形に接続      | 形容詞型の本活用形<br>に接続            |
|     | ④ |                        | 原因理由句の共起<br>文               |
| 活用形 | ⑤ |                        | 「 <u>ゝ</u> の・ <u>が</u> なり」構 |
|     | ⑥ | くならく                   | 上以外                         |
|     | ⑦ | 「き・つ」に上接               | 「けり・けむ」に上接                  |
|     | ⑧ | 「や・な」に上接               | 「とも」に上接                     |
|     | ⑨ | 連体法<br>係結びの結び<br>助詞に上接 | 推量の助動詞に上接                   |
|     | ⑩ | 係結びの結び                 |                             |
|     |   | 已然形「なれ」                |                             |

しかし、右の基準で総ての用例が識別されるのではなく、終止連体同形の活用語に接続し、終止形「なり」で終止す

る場合と已然形「なれ」が助詞を下接する場合には、どちらであるのかが明らかではないのである。

22 御達、「あらはなり」といふなり。(空蟬、八六⑧、

四段+終止形「なり」)

23 内の大臣の心ばへも、『……』と世人もめでいふな  
れど、(少女、七〇三③、四段+已然形「なれ」+ば・  
ど)

この二例はともに、「なり」が終止連体同形の四段活用動詞に接続し、かつ原因理由句と共起したり「ゝの・がなり」構文であったりもしないので、①・④・⑤の基準によつて識別することはできない。さらに、用例22は終止形「なり」、用例23は已然形「なれ」だが、ともに⑧・⑩の原則によつて識別することができない。つまり、

終止連体同形の活用語に接続し、終止形「なり」で終止する場合

終止連体同形の活用語に接続し、已然形「なれ」が助詞を下接する場合

の二つの場合には、従来の基準では識別できないのである。そこで、本稿では、『源氏物語』における終止形の「なり」

と已然形の「なれ」を対象とし、推定伝聞と断定の識別を試みようと思う。その際、「なり」の意味と形式との間に何らかの対応関係が見られるかどうかも探っていく。資料には、『源氏物語大成』校異編本文を用いる。なお、用例の引用に際しては、私に表記を改める。

考察は、便宜上、已然形の「なれ」から始めることにする。

## 一 已然形の「なれ」

### 一・一 推定伝聞か断定か

『源氏物語』に已然形の「なれ」は一〇七例見られる。まず、これらを、既に明らかになっている基準によって識別する（以下に記す①・②などは、右掲表中の項目番号である）。

#### ①終止形に接続<sup>(2)</sup>（一〇例）：推定伝聞

1 代々の国の司など、用意殊にして、さる心ばへ見す  
なれど、さらに承け引かず、（若紫、一五四⑦）

2 「……」。大将は、『年経たる人のいたうねび過ぎたる

を、いとひがてに』と、求むなれど、……」（胡蝶、七九二⑭）

#### ①連体形に接続（二例）：断定

3 やがて、世の政をし給ふべきなれど、（潘標、四八五⑨）

4 ……ことを、なま苦しく思すに、物憂きなれど、（宿木、一七〇七②）

#### ②撥音便形に接続（六〇例）：推定伝聞

5 「……」。かかること（出産）は、さのみこそ怖ろし  
かなれど、……」（柏木、一二三三六⑤）

6 「……、なにがし僧都、皆その心委しく聞き置きた  
なれば、……」など宣ふ。（幻、四一七③）

#### ⑩係結びの結びの已然形（一九例）：推定伝聞

7 ……、みな例のことにてこそは、人笑へなる咎をも  
隠すなれ。（総角、一六〇四①）

8 ぬるらかにこそ掟て給ふなれ。（常夏、八四一⑤）

なお、次のような⑤「のなり」構文の例が三例ある。

9 尼君（弁）うち笑ひて、「この宮（匂宮）の、いと  
騒がしきまで色におはしますなれば、心ばせあらん

若き人（女房）さぶらひにくげになん。『大方はいとめでたき御有り様なれど、さる筋のことにて、上のなめしと思さんなんわりなき』と大輔が女の語り侍りし」と言ふにも、（浮舟、一九〇三<sup>⑩</sup>）

10 人の、（春宮二）女ども競ひ参らすべきことを志し思すなれど、この殿（源氏）の思しきざす様のいと殊なれば、なかなかにてや交らはんと、左の大臣なども思しとどまるなるを、（源氏八）聞こし召して、

（梅枝、九八二<sup>⑭</sup>）

11（右近）「宮の上（中君）こそ、いとめでたき御幸ひなれ。右の大殿の、さばかりめでたき御勢ひにていかめしうののしり給ふなれど、若君生まれ給ひて後は、こよなくぞおはしますなる。……」といふ。

（浮舟、一八七一<sup>④</sup>）

しかし、これらは文脈から噂話をしてることが明らかであるから（特に用例10・11は推定伝聞の「なる」が近接して現れている）、推定伝聞の例だと考えられる。このことは、「のゝなり」構文は、前節の用例7「たしかに人の語り侍りしなり」のように、「なり」が終止法に立つ文節を構成す

る場合には有効な基準となるが、右の用例9～11のように接続法に立つ文節（「なれば・なれど」）を構成する場合には必ずしも基準とはならないことを示すと考えられる。

よく知られているように、主格を表す「の」は終止形終止の単文中には現れないが、修飾句・接続句の中には現れるので、右のような場合（「なれば・なれど」で接続句を構成する場合）は「のゝなり」構文の基準から外れるのだから。これは、推定伝聞「なり」と同じく終止形接続の助動詞「べし」に、「のゝべし」という用例はないが、「のゝべければ・ど」という用例があるのと平行的な現象である。

○人の見咎めつべければ、御念誦堂に籠もり給ひて、  
（薄雲、六一八<sup>④</sup>）

右の結果を整理すると、次のようになる。「不確定」とは、まだ推定伝聞か断定かが確定していない例である。

推定伝聞 九二例

断定 二例

不確定 一三例

不確定の用例については、文脈によつて検討せざるをえないのだが、判断に迷うようなものはなく、総て推定伝聞

に解釈できる。次に全用例を挙げる。

- 12 「……。程々につけて人の際々思しわきまへつつ、  
ありがたき御心様にもものし給ふなれど、……」(若  
葉上、一〇三五<sup>⑫</sup>)
- 13 「……。少将ヲ当時の帝しか恵み申し給ふなれば、  
……」(東屋、一八〇三<sup>④</sup>)
- 14 「……。八ノ宮ハ姫君タチヲしか忍び給ふなれど、  
……」(橋姫、一五二二<sup>⑦</sup>)
- 15 「……。二条の大臣(内大臣)は、心ゆき給ふなれ  
ば、……」(真木柱、九三九<sup>⑧</sup>)
- 16 「……。内の大臣の心ばへも、なべての人にはあら  
ずと世人もめでいふなれど、……」(少女、七〇三<sup>③</sup>)
- 17 「……。私(玉鬘)ノ院参ヲ右の大臣も、ひが  
ひがしきやうにおもむけて宣ふなれば、苦しうなむ。  
……」(竹河、一四八八<sup>⑤</sup>)
- 18 「……。宮(式部卿宮)にも、思し嘆きて、(北の  
方ガ)今さらに人笑へなることと、御心を乱り給ふ  
なれば、いとほしう、……」(真木柱、九四四<sup>①</sup>)
- 19 「……。、(紫上方)末の世にかく人の親だちもてな

- い給ふつらさをなん、(式部卿宮ハ)思し宣ふなれど、  
……」(真木柱、九四四<sup>③</sup>)
- 20 「……。宮の上(中の君)の、かく幸ひ人と申すな  
れど、……」(東屋、一八〇六<sup>⑬</sup>)
- 21 (源氏)「……。とぶらはんといひし人さへ、かの  
わたり近く来ゐて待つなれば、心苦しくてなん。  
……」(松風、五八八<sup>①</sup>)
- 22 (匂宮)「……。人の本意は必ずかなふなれば」と  
宣ふ。(浮舟、一八八二<sup>⑧</sup>)
- 23 「中将の君はいづくにぞ。……」といふなれば、  
……いらへすなり。(帚木、六八<sup>⑦</sup>)
- 24 「など俄には」と問ふなれば、(手習、二〇二六<sup>②</sup>)
- 用例12は光源氏、用例13は帝、用例14は八の宮について  
の噂である。用例15は内大臣に対する世間の評判。用例  
16・17は夕霧についての噂。用例18・19は式部卿宮につい  
て伝え聞いている。用例20は「中の君はこんなに幸せな人  
と世間で申し上げているそうだけれど」、用例21は「訪ね  
てやろうと言っておいた人までも、あの辺り近くに來てい  
て待っているそうだから」、用例22は「人の初志というも

のは間違ひなく思い通りになるといふことだから」とそれぞれ解される。このように、用例12～22はいずれも、噂や他人の話や伝え聞いている例である（即ち〔伝聞〕の例）。また、用例23は「(空蟬が)『中将の君はどこにいるのですか。……』と言う声が聞こえる」と、用例24は「(少将尼が)『どうして急に』と尋ねる声が聞こえる」と解される。これらは、ただ声が聞こえるというものである（次項に言う〔聞音〕の例）。このように不確定十一例を検討した結果、総て推定伝聞であることが確認されるのである。已然形の「なれ」の最終的な識別結果は次の通りである。

推定伝聞 一〇五例

断定 二例

已然形の「なれ」は、形容詞型本活用に接続する用例(用例3・4)以外は、総て推定伝聞であることがわかる。<sup>(4)</sup>

### 一・二 推定伝聞の三つの意味

次に、推定伝聞と識別された用例について、その内実を詳しく見てみよう。一般的に、推定伝聞の意味は二つ（推定と伝聞）に分けられる。

25 「……、ことごとしきけの添ひたるは、致仕の大臣の御族の笛の音にこそ似たなれ」など独りごちおはす。(椎本、一五四八<sup>(10)</sup>)

26 「……昔も今も、物念じしてのどかなる人こそ、幸ひは見果て給ふなれ」(浮舟、一八七〇<sup>(13)</sup>)

用例25は、八の宮が宇治川の対岸の夕霧大臣邸から聞こえてくる笛の音を聞いて、「致仕の大臣(頭中将)の御一族の笛の音に似ているようだな」と推察する。このように、音・声・相手の話などを聞いて背後にある事態を推察・認識するのが「推定」である。

これに対して、用例26は、「辛抱して気の長い人の方が、結局は幸せな目にお会いになるものだそうだ」と解される。このように、他人の話・噂・俗信など伝え聞いたことを認識しているというのが「伝聞」である。

ところで、推定伝聞には、この二つの他にもう一つ意味があると考えられる。先に挙げた用例23・24がそれである。

27 「中将の君はいづくにぞ。……」と言ふなれば、……人々臥していらへすなり。(帚木、六八<sup>(7)</sup>／用例23の再掲)



28 「など俄には」と問ふなれば、「……」など……言ひなす。(手習、一〇二六②) / 用例24の再掲)

既に述べたように、用例27は空蟬の言う声が聞こえ、用例28は少将尼の問う声が聞こえる、という例であった。この二例は、背後にある事態を推察している(推定)わけでも、話や噂を伝え聞いている(伝聞)わけでもなく、それは、音や声などを知覚するという意味である。この意味を推定・伝聞とは異なるものとして区別し、松尾捨治郎(一九四三)が「感覺的に音響を聞く事」と記述しているが、本稿では岡崎正継(一九八九)に依って「聞音」と呼ぶ。岡崎正継(一九八九)による、三つの意味の定義を次に抜粋する。

聞音 音・声<sup>が</sup>聞こえてくる意、または、聞こえてくるやうだといふ意を表す。

推定 音・声・話(主として相手の話)などによって推定する意を表す。

伝聞 他人の話・噂・故事・諺・風俗・習慣・俗信・和歌・漢詩文・法語などを、伝聞したこととして、または書き物で知ったこととして表す。

これを踏まえ、已然形「なれ」について、三つの意味に分類し、それぞれの用例数を示すと、

已然形「なれ」 聞音 二例

推定 二八例

伝聞 七五例

となり、圧倒的に伝聞の用例が多いことがわかる。聞音は右に挙げた用例27・28の二例しかなく、推定は二八例あるが、これには偏りが見られる。即ち、二八例中一六例が、「なれ」の上が名詞接続の「なり」(非融合形の「にあり」)なのである。

29 東の対の方に、面白き笛の音、笙に吹き合はせたり。

……。「頭中將にこそあなれ。……」(篝火、八五七)

④

30 「……。さる心して見え奉り給ひなんや」と宣へば、

「いとうれしきことにこそ侍なれ。……」(常夏、

八四五⑩)

以上の考察の結果をまとめる。

一、已然形の「なれ」が形容詞本活用に接続する場合(二例)は断定で、それ以外は推定伝聞である。

二、推定伝聞の「なれ」を聞音・推定・伝聞の三つの意味に分けると、圧倒的に伝聞の例が多い。また、推定は名詞接続の「なり」（非融合形「にあり」）に下接する場合に偏る。

## 二 終止形の「なり」

次に、終止形の「なり」について見る。『源氏物語』に終止形の「なり」は一七七例見られ、これらを、まず、已然形「なれ」の場合と同じく、既に明らかになっている基準によって識別する。

### ①終止形接続（一〇例）…推定伝聞

31 鐘の声かすかに響きて、明けぬなりと聞こゆる程に、

（椎本、一五六〇⑪）

32 「かの御方の中将の君」と聞こゆなり。（蜻蛉、

一九八〇③）

### ①連体形接続（六九例）…断定

33 「……宮の御心のいとつらきなり。……」（少女、

六八五⑥）

34 「……すきずきしき方にはあらで、まめやかに聞

こゆるなり」（若紫、一六一②）

### ②撥音便形接続（五六例）…推定伝聞

35 女は宮仕へを物憂げに思いたなりと、……、漏り聞

きて、（藤袴、九二八⑪）

36 御衣の音なひ、さばかりななりと聞きみ給へり。（夕

霧、一三二④）

### ④原因理由句の共起（四例）…断定

37 「……、ただ、御前の御心の哀におはしませば、さ

ぶらふなり」（行幸、九〇九⑧）

38 「……、後の宮の御文など侍りければ、下りさせ給

ふなり」（手習、二〇二六⑥）

### ⑤「の」なり」構文（二例）…断定

39 御前のつらくおはしますなり。（行幸、九〇八⑩）

このように、従来知られている基準にしたがって識別した結果が次である。

推定伝聞 六六例

断定 七四例

不確定 三七例

次に、不確定の用例三七例を別の観点によって識別するわけだが、主語の人称について見てみる。既に指摘のある通り、推定伝聞の主語には一人称がこないで、一人称主語に照応する「なり」であれば、断定と見なすことができるからである。次に挙げる五例はいずれも一人称主語の例で断定だと考えられる。

40 「……。これたゞ後やすき事を取り申すなり」と、

(東屋、一八〇二<sup>⑩</sup>)

41 「光源氏ハ夕顔ヲ」世に忘れ難く、悲しき事になん思して、『……』とそのかみより宣ふなり。……(玉鬘、七三九<sup>⑭</sup>)

42 「身づからの夢にはあらず、人の御事を語るなり。

……」(若紫、一七六<sup>①</sup>)

43 「かひなき様ながらも、心のどかに御覽せらるべき事を思ふなり」(滯標、四八五<sup>⑥</sup>)

44 「……物忌により、京のうちさへ去りて慎むなり。

外の人寄すな」と言ひたり。(浮舟、一八九四<sup>①</sup>)

例えば、用例42は、源氏が「私の夢ではなく、ある方の夢のことを話しているのだ」と説明し、用例43は、位を退

いた朱雀院が自分の考えを説明している。用例44は、時方が自分のことを宿守に説明し、「慎む」のは「物忌み」という事情によるのだということ言っている。<sup>⑥</sup>

残りの三二例は非一人称主語で、すべて推定伝聞と見なして問題ない。その中の、まず、次の十一例は聞音の意味を表している。

45 「……。この御格子はさしてむ」とて、鳴らすなり。

(空蟬、八九<sup>⑤</sup>)

46 「宿直申し、さぶらふ」と声づくるなり。(賢木、

三四八<sup>⑧</sup>)

47 よく鳴る琴を、……、賑ははしく弾きなすなり。(花

散里、三八七<sup>⑬</sup>)

48 いと騒がしう、夜一夜行ふなり。(玉鬘、七三七<sup>⑫</sup>)

49 律師も加持する音して、陀羅尼いと尊く読むなり。

(夕霧、一三二四<sup>②</sup>)

50 「寅一つ」と申すなり。(賢木、三四八<sup>⑪</sup>)

51 奥の方よりるざり出で給ひて、「……。よくこそ面

なけれ」と忍びて宣ふなり。(竹河、一四七〇<sup>⑧</sup>)

52 人々起き出でて、「……。御車引き出でよ」などい

ふなり。(帚木、七一<sup>⑫</sup>)

53 御達、「あらはなり」といふなり。(空蟬、八六<sup>⑧</sup>)

54 「今渡らせ給ひなん」と人々いふなり。(東屋、

一八二五<sup>③</sup>)

55 「…昔も今も物念じしてのどかなる人こそ、幸

ひは見果て給ふなれ」などいふなり。(浮舟、

一八七〇<sup>⑬</sup>)

例えば、用例48は、琴を弾いている音が聞こえるのであり、用例54は、御達が「あらはなり」と言っている声が聞こえるのである。

次の六例は推定の意味を表している。

56 よべの方より出で給ふなり。いと柔かに振舞ひなし

給へる匂ひなど、(総角、一六一九<sup>⑧</sup>)

57 今夜は、まだ更けぬに出で給ふなり。御先の声の遠

くなるままに、(宿木、一七二八<sup>⑭</sup>)

58 宮は急ぎて出で給ふなり。…、物宣ふ御声も聞こ

ゆ。(東屋、一八二九<sup>⑧</sup>)

59 うち咳き給へれば、「中将の声づくるにぞあなる。

…」とて、起き給ふなり。(野分、八六九<sup>①</sup>)

60 律師も加持する音して、陀羅尼いと尊く読むなり。

「いと苦しげにし給ふなり」とて、人々もそなたに

集ひて、(夕霧、一三二四<sup>②</sup>)

61 衣の音なひ、著きけはひして、母屋の御障子より通

りて、あなたに入るなり。(蜻蛉、一九八〇<sup>②</sup>)

例えば、用例60は、祈祷の声を聞いて、「(御息所が)た

いそう苦しうにしていらつしやるようだ」と推察し、用

例61は、「衣の音なひ、著きけはひ」を知覚して、「(人が)

あなたに入る」ことを推察していると解される。

次の一五例は伝聞の例である。

62 (薰大将ガ浮舟ニ) あはれにはた聞こえ給ふなり。

(東屋、一八〇六<sup>⑥</sup>)

63 人のいみじく惜しむ人をば、帝釈も返し給ふなり。

(蜻蛉、一九三四<sup>⑪</sup>)

64 そのわたりの下衆などの僧都に仕まつりける、かく

ておはしますなりとて、とぶらひ出で来るも、(手習、

一九九六<sup>⑥</sup>)

65 さるやむごとなき妻どもおはしますなり。(玉鬘、

七三九<sup>⑩</sup>)

- 66 「……。院の上だに、『……、独り大殿籠る夜な夜な多く、つれづれにて過ぐし給ふなり』など人の奏しけるついでにも、……」（若菜下、一一七三③）
- 67 山の帝は、二の宮もかく人笑はれなるやうにてながめ給ふなり、（横笛、一二六九⑭）
- 68 「……。兵部卿の宮内裏におはすなり。一枝折りて参れ。……」（紅梅、一四五三②）
- 69 「……。（薫ガ宇治へ）通ひ給ふことは、去年の秋頃よりは、ありしよりもしばしばものし給ふなり。……」（浮舟、一八六五⑪）
- 70 「……、（薫ハ中の君ヲ）ことごとしうももてなし給はざりけるを、いみじう悲しび給ふなり。……」など語る。（手習、二〇四三⑥）
- 71 「……。『軽々しき御有様』と、世人も下に誇り申すなり」と、衛門の督の漏らし申し給ひければ、（総角、一六四二⑫）
- 72 「……、何事も弁へさせ給ふべき時に至りて、咎をも示すなり。……」（薄雲、六二一⑤）
- 73 「……。大将は、……と、求むなれど、それも、人々

煩はしがるなり。……」（胡蝶、七九二⑭）

74 人多く立ち騒ぎて、「今夜やがて（浮舟ノ亡骸ヲ）

をさめ奉るなり」など言ふを、（蜻蛉、一九三三⑩）

75 「……。『夜語らず』とか、女房の伝へにいふなり」（横笛、一二八六③）

76 「……。下衆は僻事もいふなり」（蜻蛉、一九三三⑦）

例えば、用例64は、「僧都がいらつしゃつていそうだ」と聞きつけて、以前仕えていた者たちが訪ねて来る場面であり、用例73は、「髭黒の大将は新妻を探しているそうだ」けれど、北の方側の人々は厄介がつているそうだ」と解される。用例74は、宇治の邸内の人々が「今夜、浮舟の亡骸をお納め申し上げるそうだ」と噂しているのである。

このように、非一人称主語と照応する「なり」の用例は総て推定伝聞である。したがって、最終的な分類結果は次のようになる。

推定伝聞 九八例

断定 七九例

終止形「なり」は、已然形「なれ」と違い、推定伝聞の用例が若干多いが、推定伝聞と断定がほぼ同じくらい見ら

れることがわかる。

次に、推定伝聞の用例を、聞音・推定・伝聞の三つの意味に分類すると、

終止形「なり」 聞音 一三例

推定 四四例

伝聞 四一例

となる。これも已然形「なれ」の場合と違い、伝聞に大きく偏ることはない。しかし、聞音の例が少ない点は共通している。また、推定の用例のうち、名詞接続の断定に下接する例が多い（四四例中一五例）点も、已然形と同様である。

77 「さらば、その遺言なりなりな。……」とて、（若菜上、

一一〇四⑥）

78 いと柔かにうちみじろきなどし給ふ御衣の音なひ、

さばかりななり、と聞きぬ給へり。（夕霧、一三二二

④）

以上の考察の結果をまとめる。

一、終止形の「なり」のうち、従来の識別基準では明らかにならない例は、主語の人称によって、一人称の場

合は断定、非一人称の場合は推定伝聞に識別できる。

二、推定伝聞の終止形「なり」を聞音・推定・伝聞の三つの意味に分けると、いずれかに大きく偏ることはない。ただし、推定は名詞接続の断定に下接する場合に偏る。

おわりに

本稿で述べてきたことをまとめると、次のようになる。

一、已然形の「なれ」が形容詞本活用に接続する場合（二例）は断定で、それ以外は推定伝聞である。

二、終止形の「なり」のうち、従来の識別基準では明らかにならない例は、主語の人称によって、一人称の場合に断定、非一人称の場合は推定伝聞に識別できる。

三、推定伝聞を聞音・推定・伝聞の三つの意味に分けると、已然形の「なれ」は圧倒的に伝聞の例が多い。また、推定は名詞接続の「なり」（非融合形「にあり」）に下接する場合に偏る。一方、終止形「なり」はいずれか

に大きく偏ることはない。ただし、推定は名詞接続の断定に下接する場合に偏る。

なお、右の一と二については、他の資料においてもほぼ同様の結果になる(『大和物語』は岩波古典文学大系を使用。それ以外は岩波新日本古典文学大系を使用した)。参考までに表にして示す。

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
|    |    | 竹取 | 伊勢 | 大和 | 土佐 | 蜻蛉 | 堤中 | 更級 |
| 断定 | 0  | 已  | 已  | 已  | 已  | 已  | 已  | 已  |
| 推伝 | 3  | 終  | 終  | 終  | 終  | 終  | 終  | 終  |
|    | 16 | 0  | 0  | 4  | 1  | 20 | 6  | 4  |
|    | 0  | 0  | 3  | 3  | 5  | 33 | 6  | 4  |
|    | 1  | 0  | 1  | 2  | 7  | 6  | 5  | 1  |
|    | 0  | 0  | 4  | 3  | 0  | 13 | 0  | 2  |
|    | 2  | 0  | 2  | 0  | 6  | 6  | 5  | 1  |
|    | 0  | 0  | 1  | 0  | 7  | 13 | 0  | 6  |
|    | 7  | 0  | 5  | 0  | 6  | 6  | 5  | 1  |
|    | 6  | 6  | 20 | 33 | 6  | 6  | 5  | 1  |
|    | 13 | 33 | 6  | 6  | 5  | 13 | 0  | 2  |
|    | 0  | 6  | 4  | 4  | 5  | 6  | 5  | 1  |
|    | 5  | 4  | 4  | 4  | 5  | 6  | 5  | 1  |
|    | 1  | 2  | 2  | 0  | 6  | 6  | 5  | 1  |
|    | 6  | 12 | 6  | 6  | 5  | 6  | 5  | 1  |

## 注

- (1) これらの原則は、小松登美(一九六〇)、田島光平(一九六四)、北原保雄(一九六六)に基づいている。なお、「なり」の研究史については高山善行(二〇〇二)に詳しい。
- (2) ただし、『源氏物語』には見られない。
- (3) 「終止形に接続、連体形に接続」とある場合には、終止連体同形に接続する場合を含まないこととする。

(4) 形容詞型本活用の二例が連体なり(断定)であることは、北原保雄(一九六六)六九頁の表に示されている。

(5) 小松登美(一九六〇) 研究を参照。

(6) 小柳智一(二〇〇二)は、連体形接続の「なり」は、「直面したある事態を、確定的なこととして認定する事態確定」と「直面した事態が、ある事情(理由)のもとで成立したことを、確定的なこととして認定する事情確定」とに分けられることを指摘しており、断定の意味を考える際に参考になる。

(7) 仁科明(二〇〇七)は、用例61のようなものを「終止なり」によって『推論行為』が表されているというよりは、個別事態を直に感じ取っている(見て取っている)ことが表されていると考えるべきかと思う」と述べ、中古に新たに獲得した用法として「看取」と称している。

## 参考文献

- 松尾捨治郎(一九四三)『助動詞の研究』文学社
- 小松登美(一九六〇)「土佐日記の解釈と文法上の問題点」『講座 解釈と文法4』明治書院

田島光平（一九六四）「連体形承接の『なり』について―竹  
取物語を中心にして―」『国語学』五・六

北原保雄（一九六六）「（終止なり）と（連体なり）―その分  
布と構造的意味―」『国語と国文学』四三・九

岡崎正継（一九八九）「推定伝聞の助動詞『なり』について  
―その承接と意味―」『國學院雜誌』九〇・三

小柳智一（二〇〇二）「和歌における活用語接続のナリ」『徳  
江元正退職記念鎌倉室町文學論纂』三・弥井書店

高山善行（二〇〇二）『日本語モダリティの史的研究』ひつ  
じ書房

仁科明（二〇〇七）「終止なり」の上代と中古」青木博編『日  
本語の構造変化と文法化』ひつじ書房

付記 本稿は、國學院大學国語研究会平成十三年度後期大会

（二〇〇一年十一月十七日）で口頭発表したものを基とし  
ています。